

姫路の領主：本多家(1617-1639 & 1682-1704)

本多忠政と本多忠刻が西の丸を建てる

本多忠政(1575-1631)とその息子で相続人の忠刻(1596-1626)が 1617 年に姫路に到着し、一家は城主として池田一族を取って代わるよう指名された。忠刻の妻千姫(1597-1666)は徳川幕府の創設者である徳川家康(1543-1616)の孫娘だった。そして城は二人のために豪華な邸宅を取り入れるために拡張され、西の丸に中書丸と化粧(装飾の意味)櫓が、大手門近くの三の丸に武蔵野御殿が加えられた。

本多家はとても裕福であった。姫路への移転の前からでさえ忠政と忠刻は合わせて 15 万石の収入があった。しかし忠刻の千姫との結婚が一家の財産をさらに改良させた。姫の持参金の一部として忠刻は 10 万石の追加収入とさらに他の所有地を与えられた。その前の池田一族のように本多家はその地方の支配的権力となった。

西国での徳川支配を強固にする

本多一族は徳川家康の忠実な従者であった。彼らは次の将軍が権力に上ろうとするとき一緒に戦った。一族の指導者のひとりである本多忠勝(1548-1610)は家康の「四天王」の一人となった。「シテンノウ」とは“4 人の天の王”を意味し、4 つの重要な方角を守る仏教における神々に由来する。

大坂の陣(1614-1615)で豊臣一族を滅ぼしたあと、家康は 1617 年に姫路の支配を本多家に移した。豊臣家は徳川家の前に日本を支配していた。長きにわたる徳川の部下を西日本の重要な領地、つまり敵の以前の本拠地から遠くない領地へ任官することは将軍の権力の強化を示すと同時に、徳川幕府にとっての姫路城の戦略的重要性を示している。

姫路城の説明図

この現代の図は 18 世紀初め頃の姫路城の中心部を示しているが、それは本多忠国(1666-1704)が支配するときだった。建造物に描かれている中には西の丸の廊下と物見櫓、そして本多忠刻のために建てられた邸宅の中書丸がある

本多忠政